クシャトラパの性格およびかれらの佛教歸依についての諸問題

佐々木教悟

一

西歴前二世紀から後三世紀にいたる約五百年間は、大乘經典の成立という問題をめぐつて、インド佛教史上重要な時期に相當すると考えられるのであるが、史料上の制約、傳承上の不一致、その他いくたの難關があるために、この時期における綜合的な佛教思想展開のあとは、いまだに明かにせられないままでのこされている。從來より、多くの學者は、異部宗輪論、パーリの論事、大毘婆沙論などの研究から、大乘思想は部派の中でも進歩的な思想傾向を有していた大衆部から發達したものであり、そして南インドのアンドラ地方に根據地をもつていた大衆部がその淵叢であろうと考えてきた。ところが近年では、考古學上の遺跡の調査、發掘品の研究、碑銘、寫本その他の研究から、大乘思想は、かならずしも南インドからのみ興起したわけではなく、さらに一層廣い範圍にわたるのであり、カニシュカ王時代におけるクシャーナ王國の領土となつた地方、とくにインドの西北部、中央アジア、コータン地方から興つてきたもので、地理的に考えるならば、むしろ南インドよりも西北インドの方に關係が深い、と考える學者が增してきた。このような見解の推移は、あだかも般若思想の普及過程と揆を一にしているがごとくである。それは般若經みずからの中に「是深般若波羅蜜。佛般涅槃後。當至南方國土。……從南方當轉至西方。……從西方當轉至北方。[1]」と述べて、般若思想の普及してゆく方向を豫言のかたちで示しているからである。學者はこれによつて、般若經の原型の成立は南インドにおいてであり、增廣せられたかたちのも

のの成立は西北インドにおいてであつたと見ようとする。ところで、法華經の成立はガンダーラもしくはカピシャー地方、無量壽經もガンダーラ地方において成立したともいわれ、[2] その他の初期大乘經典をもふくめて、これらはいずれも南インドよりもむしろ西北インドから中央アジアにかけての地域に關係せしめられている。そこで、ここに注意を惹くのは、前掲の般若經の文に、南方と北方との間に、西方という舞臺があげられていることである。もちろんその西方というのは漠然たるいいかたで、嚴密にどこからどこまでというように區域的に明示することはできないにしても、とにかく西部インドということが問題とされている點はうたがいもなき事實である。初期大乘經典の成立を年代上からいえば、ほぼ前五〇年から後二〇〇年にかけての時期とみるのが妥當であるが、その時期における西部インドといえば、ただちに浮び上つてくるのは、インド・スキタイすなわちサカ族の動靜である。かれらは佛教思想展開の上に何らかの寄與をなしたのであろうか。あるいはなさなかつたのであろうか。もしもなしたとすれば、それはいかなる程度のものであつたであろうか。この小論は、以上のごとき諸問題に關心をよせつつ、主として西部インドを舞臺として活動したクシャトラパの性格ならびにかれらの佛教歸依の態度について若干の考察をなそうとするものである。

① 大品般若經卷十三、大正八・三一七中

② 宮本正尊編『大乘佛教の成立史的研究』附錄第一、大乘經典の成立時代

二

《L'Inde classique》の年數算定[1]にしたがえば、サカ族 Saka or Śaka (=Indo-Scythes) のインド侵入の時期は、西紀前九〇年——同八〇年の頃のことで、かれらはいく手にも分かれてインドの內部へと浸透していつたもようである。すなわち、この民族はイラーン系の遊牧民族にして、もとはカスピ海東方からヒンドゥークシュ山脈附近にかけての地域にいたが、前二世紀頃南下を開始して現在のアフガニスターンをへ、上述の頃にインダス流域に侵入してきたといわれている。シナの文獻においては、この民族に對して塞 Sai の字をあて、これを塞種と呼んでいる。かれらが南下せねばならなかつたのは、大月氏の壓迫をうけたからであり、そこには、匈奴、烏孫、月氏という遊牧民族の一連の動きがあるのである。レヴィ氏

は、この動きを〝スキタイ世界に對するシナの壓迫〟として把握している。[2] さてサカ族のたてた王朝の祖は、マウエス Maues であるが、そのマウエスにつづいて出たアゼス一世 Azes I、アジリゼス Azilizes などの、いわゆるスキト・パルチュ Scytho-Parthes 諸王の活動によつて、從來のインド・ギリシア諸王朝の勢力は、しだいに弱められてゆくことになつたとみられる。現在でもなお、ヒンドゥ教徒が使用しているといわれるヴィクラマ紀元 Vikrama Saṃvat は、西紀前五八年（もしくは前五七年）[3] を、その紀元の元年とするものであるが、それは前述のサカ族の王であつたアゼス一世の治世にはじまつている。アゼス紀元とヴィクラマ紀元とを同一視するかしないかという問題は、學者によつていろいろと論じられてきたが、《L'Inde classique》の見解にしたがえば、兩者は同一のものを指すと考えられる。さらにジャイナ教徒の傳承するところによれば、このヴィクラマ紀元は、ウッジャイニー Ujjainī の王であつたヴィクラマーディトヤ Vikramāditya〔超日〕がサカ族に打勝ち、そのサカ族に對する勝利を記念して創始せられたものと考えられている。ところで、このヴィクラマーディトヤなる王をアンドラ王朝のガウタミープトラ・シャータカルニ Gautamīputra Śātakarṇi（AD. 106-130 circa）にあてる學者もあるが、年代の考證上からそれには難點がある。《L'Inde classique》はアヴァンティ Avanti（西部マーラヴァ Mālava）におけるアンドラブリトヤ Andhrabhṛtya によるサカ族の敗退を、この年すなわち前五八年においている。それはアンドラブリトヤの即位が前七〇年頃に行われたものとしてである。このアンドラブリトヤとは、いかなるものであるかというに、それはもともと《アンドラの隷屬者》を意味する語であつて、南のアンドラに對して西方の陪臣という關係にあるものを指した。すなわちアンドラを支持したところの王を意味する。アンドラの支配下に入り、アンドラを支持した王は數多くあつたわけであるが、なかでも有力な王は、いままでその支配をうけていた王の勢力を、さらに一層凌駕するほどの力をもつにいたつた。そして、一時アンドラ全體に號令することができた。いまのヴィクラマーディトヤなる王が、はたしていかなる王を指したか明かでないとしても、以上述べたところのアンドラブリトヤとしての性格を有していたものとみられるのである。ところで、いまいうところのこの時代におけるヴィクラマーディトヤは、一種の傳說的人物として考えられているにすぎないが、後になると

グプタ王朝のチャンドラグプタ二世 Candragupta II (AD. 360–420 circa) が、當時なおも有力であつたウッジャイニーのサカ族の王を討つて、ヴィクラマーディトヤなる名を得たことが明かとなる。そしてこの稱號は、さらにその後、グプタ朝以外に Early Cālukya の諸王 (Vikramāditya I, 655–680 ; II, 733–746) や、Eastern Cālukya 朝の諸王 (Vikramāditya I, II, その治世年代は明確でないためにあげない) や、Kalyāṇa のチャールキャ朝の諸王 (Vikramāditya III, IV, V (1008–1014), VI (1076–1127)) の好んで用いるところとなつている。そこには、あきらかにヴィクラマーディトヤなる傳統の revival が認められるのである。[4] いずれにしても、ヒンドゥ諸王と異民族にして侵入者であつたサカ系諸王とのあいだには、當然のことながら、いくたの軋轢や爭鬪が繰返して行われたのであり、ヴィクラマーディトヤというのは、その際におけるヒンドゥの象徴として、異民族に對する勝利を讃えたタイトルであつたとみられるのである。それはインド人のだれしもがもつ一つの民族的な誇りへとたかめられていつた。そして異民族とその子孫、さらにはその混血のものをもふくめて、すべてがその誇りの下にヒンドゥ化せられてゆき、[5] ともにヒンドゥ文化復興の擔い手となつていつたのであろう。そのヒンドゥ文化復興の據點がウッジャイニーであつたということには意味がなければならない。かのヴィクラマーディトヤの宮廷に九寶 Navaratna とたたえられる九人の大文豪が出入し、その一人はサンスクリット文學史上不朽の名聲を克ち得ているカーリダーサ Kālidāsa であつたといわれていることは、いまもなお傳説の域をいでないものと考えられるが、かれの作品に Vikramorvaśī なる戯曲のあつたことが注目せられる。思うに、カーリダーサの出現 (400–460 circa) するその前に、すでに古典時代における文化隆盛の氣運が、その内部において活潑に動いていたのである。この觀點からすれば、ウッジャイニーに都したサカ族の王がサンスクリット文學の發達にあずかつて力があつたとする見解は、[6] 注目に値するものといわねばならぬであろう。

① L'Inde classique § 512
② L'Inde civilisatrice, Chapitre IV
③ この紀元は、通常、北インドで行われ、傳説王ヴィクラマーディトヤの第一年を、前五七年二月二三日として、それから計算せられるともいわれる (杉本直治郎「チャムパの暦法とその起源」『東南アジア史研究』I、一五一頁)。
④ An Advanced History of India, 2nd ed. p. 184
⑤ インドの佛教は、その末期においては變貌してヒンドゥ

教的發展をとげるが、末期において佛教教學の中心地となつた學問寺が Vikramaśila と呼ばれて、ヴィクラマを名のつていることを想起する。しかしながら、この大學問寺は、異民族（アラビア人＝イスラム教徒）によつて燒却されてしまつた（一二〇三年）。イスラム教徒のヒンドゥ化は、他の場合と違つて不可能に近かつた。けれどもヒンドゥはやがてかれとの調和を見いだすことになる。

⑥ 岩本裕『インド史』六〇頁

三

インドに侵入してきたサカ族のなかには、タクシラ Taxila 附近に根をおろしたものもあるが、とくにインダスのデルタ地帶より南に向つたものは、《豐饒の地》という意味をもつスラーシュトラ Surāṣtra 地方に進出して、その地に據點を占めることとなつた。かれらがこの肥沃の地を見つけて、そこに占據したことは、そののちサカ族が相當長期にわたつて榮えることになつた理由の一つと考えられる。インド・ギリシアの支配下にあつたときも、さらにまた、クシャーナの支配下にあつたときも、かれらは王というよりも、クシャトラパ Kṣatrapa（satrapēs 太守）なる名であらわれていた。したがつて、このカーティアーワール Kāthiawār 半島地方にあつても、かれらは同様にクシャトラパとして、該地方の行政に關與していたことはたしかである。そしてその性格は封建的藩侯というような色彩を帶びていたものと見られる。サカ族は塞種として、早くからシナにも知られているが、『後漢書』の記述①によれば、かれらは大國をたてながらも、軍事的には弱い方の種族であり、むしろ商業を得意としていたことが知られる。

ところで、西インドのアラビア海にのぞむ沿岸一帶は、西暦紀元前後には、諸外國とのあいだの商取引がひじように活潑となつており、かれらはその海上貿易を容易に利用し得る地位にあつた。アラビアないしはエジプト、およびそれらの地方の諸港市を介して行つた地中海諸國とのあいだの貿易は、西インドや南インドの經濟力を豐にするものであつた。學者によつて西歴一世紀（四〇―七〇年）に成立したものとの判斷が下されている《エリュトゥラー海案内記 Periplus Maris Erythrei》のなかには、つぎのごとき記述があつて、上に述べた點をうらがきしている。

バラケースの後には、じきにバリュガザの灣とアリーアケー地方の海岸となるが、後者はマンバノスの王國と全インドとの始まりである。この地方の中、

スキュティアーに境を接する内地の部分はアベーリアーと呼ばれ、沿海地方はスュラストゥレーネーと呼ばれる。この地方は麥や米や胡麻油や牛酪や棉やこれから出來るありふれた印度木棉を豐富に產する。また此處には、極めて澤山の牛の群と體軀頗る偉大で色の黑い人々が居る。この地方の首都はミンナガラで、此處からまた極めて多量の綿布がバリュガザに運び下される。(以下省略)〔第四十一節〕②

この記述のなか、バラケース Barakēs は現在の Cutch 灣を、バリュガザ Barygaza は現在の Broach (Bharoch) を指すことは、すでに明かにせられている。またアリーアケー Ariākē は、《アーリヤ人の土地》の義で、それは Āryāvarta に由來する語と考えられており、バリュガザ灣の兩岸地方一帶の總稱とみられる。つぎにマンバノスの王國といわれるそのマンバノス Mambanos とは、マハーラーシュトラの Kṣaharāta Satrapēs なる王のことで、それは後に述べるところの Nahapāna に相當すると考えられる。スキュティアー Skythiā とあるのは Skythai すなわちペルシャ人がサカと呼ぶ種族のことであるから、サカ族が占據して勢力をもつていた地方が、その當時スキュティアーと呼ばれていたのであろう。具體的にいつて、いまの場合のそれが何處を指したものかは異論のあるところであるが、『案內記』のそこの前後の文意から考えると、ナルマダー河の河口附近を指したものととるのがもつとも妥當と思われる。古來より Skythia (Scythia) の比定については、『案內記』の第三十八節の記述に合致するごとくに說がたてられて、インダス河の河口附近よりパンジャーブ地方にかけての地を指すと考えられてきたが、③ Skythia という呼稱には漠然たるものがあり、現在のアーメダバードの南邊もスキュティアーと呼ばれていたのではないかと思われる。つぎにアベーリアー Abēriā は Gujarat 地方を指したものであり、スュラストゥレーネー Syrastrēnē は前述のスラーシュトラである。このスラーシュトラをもうすこし嚴密にいえば、カッチとブローチとのあいだによこたわるカーティアーワール半島の南岸を指したものということになる。ミンナガラ Minnagara はスキュティアーの首都にして、現在の Indore 附近にあつた都城であろう。それはウッジャイニーすなわちウジャインの南に位置している。『案內記』第三十八節に見えるインダス河畔のミンナガルとは別のものである。

以上の解說によつてもほぼ推察がつくと思われるが、

この時代において、バリュガザを中心とした附近一帶は物資の集散地であり、外國貿易の基地であり、西方文化のインドに入り來る門でもあつた。そこからはウッジャイニーを通じて北インドにも中インドにも南インドにも大交通路が開かれてあつた。そのことは、すでにフーシェ氏の研究[4]によつて證明せられている。そしてレヴィ氏の見解[5]にしたがえば、古代のインドが有した二つの中心のその一つが、まさしくこのウッジャイニーを背後にかかえたカンベイ灣の附近にあつたのである。サカ族はこの地域に居を占めた。

① 後漢書卷七十六
② 村川堅太郎譯本一〇七頁
③ J. E. Van Lohuizen-de Leeuw: The "Scythian" period. p. 437
④ La vieille Route. Vol. 1, p.
⑤ S. Lévi: L'Inde civilisatrice p. 12（譯註本七頁）

四

サカ系諸王、いいかえれば Śaka-Pahlava 諸王が數地區にまたがつて、それぞれの地を支配したことは明白な事實とすべきであるが、これらの行政上の單位の統治者たちは、すでに一言したごとく、Kṣatrapa あるいは Mahākṣatrapa として知られている。そこでかれらのいた地を區分してみると、だいたいつぎのごとくになる。

(1) アフガニスターンのゴールバンドおよびパンジシルなる兩河の接點に位置するカピシャー
(2) 西パンジャーブのタクシラ
(3) ジャムナー河流域のマトゥラー
(4) 上部デッカン
(5) マーラヴァのウジャイン

なかでも、この時代にスラーシュトラとマーラヴァに勢力を占めたマハークシャトラパとともに、マハーラーシュトラ Mahārāṣṭra（あるいは Devarāṣṭra ともいふ）のもつとも南に勢力を占めたクシャハラータ Kṣaharāta の動靜には注目を要するものがある。クシャハラータとはサカ族の一支族と考えられるものであり、上掲の區分では(4)に屬せしめることができる。かれらは初期サータヴァハナ王國の領土にまで進出していたのである。すなわち、かれらの首長はナハパーナ Nahapāna であつたが、かれは前述のミンナガラに據點をおき勢力を擴大したといわれている（七八年頃）[1]。Dinika の息子でナハパーナの女婿であるウシャヴァダータ Uṣavadāta（＝Ṛṣabhadatta）のときに、このサカ族の勢力はさらに伸張して、Karli にま

でおよんだ。Nasik の第八窟には、サータカニにかわつてかれらが佛教の教團を支持した記錄がのこされている。[2] かれの妃すなわちナハパーナの娘は、佛教歸依者として王妃の名で二、三の窟院を四方僧伽 caturdaśā saṃgha に寄進している。[3] またウシャヴァダータ自身も教團に對して三千カーハーパナ kāhāpaṇa の寄附を行つている。[4] これは窟院に止住する四方僧伽の比丘たちの四資具にあてる目的のものであつたが、この金子のうち二千カーハーパナは、Govardhana にあつた織物業者の組合に、月に一 paḍika の利息で貸付けられた。また殘りの一千カーハーパナも、他の組合に、月に四分三 paḍika で貸付けられた。そしてこれらのカーハーパナは元金の拂戻しは許されず、その利子のみが要求しうるものであつたという。一パディカで貸付けられた二千カーハーパナは、兩期の間、その窟院ですごす二〇名の比丘の衣料にあてらるべき性質のものであり、四分の三パディカで貸付けられた一千カーハーパナは、窟院の維持費にあてらるべき性質のものであつたが、この時代に、かような形式で僧伽に對する寄進が行われたということは記憶にとどむべき事柄といわねばならぬであろう。おそらくそこには、教團當事者の意向も反映していたにちがいないと思われるのであるが、教團の支持ということと業者の繁榮ということをマッチせしめた一種の實用主義ともいうべきものが、クシャトラパとしてのウシャヴァダータの上に動いていたとみるのは誤りであろうか。かれらは佛教の教團に對して、金錢や衣食以外に、僧房や土地なども盛に寄進した。ところがそのような寄進は、單に佛教の教團に對してのみでなく。ヒンドゥ教のバラモンに對しても、同樣に行つたことが知られる。銘文[5]はかれらがバラモンに對して、牛、浴場、村落などを寄進したことを物語つている。

このクシャハラータについては、なお考察すべきことが多くあるが、その壽命は比較的短くて、西紀一二〇年頃になると、かのサータヴァーハナ家の衰運を挽回した Gautamiputra Śātakarṇi (卽位を九〇年とする人もある) のために擊破せられて、ついに衰えてしまつた模樣である。

マハーラーシュトラの Kṣaharāta Satraps は Bhūmaka—Nahapāna—Dakṣamitra と次第相續せられたが、いわゆる西クシャトラパと呼ばれる系統は、Caṣṭana—Jayadāman—Rudradāman I—Dāmajadaśrī—Jīvadāman—Rudrasiṁha I—Rudrasena I—Saṅghadāman—Dāmasena とつづいていつた。この西クシャトラパの系統の諸王に關して、われわれは

つぎのことを知る。Caṣṭana (Ptolemy の Tiastanes) をはじめ、これらの太守たちはウッジャイニーを本據としたこと、かれの孫のルドラダーマン一世（130–150 circa）のとき、もつとも勢力が擴大せられ、マーラヴァとカーティアーワールを掌握したことである。このルドラダーマン一世は、貨幣（銀貨）の銘の上では、つぎのごとくあらわされている。[6]

Rājño Kṣatrapasa Jayadāmaputrasa
Rājño Mahākṣatrapasa Rudradāmasa

すなわち、かれはマハークシャトラパであつた。かれに關する貴重にして豐富な歴史的事實を記す碑文がカーティアーワール半島の Girnār の岩壁に存するが、それはアショーカ王の法勅をもつ岩である。その碑文はマウリヤ朝チャンドラグプタの治水事業ならびにアショーカの治水事業について記し、さらに後にサカ族が貯水池の修理を行つた旨を述べている。[7] これは、その當時において農民の灌漑事業に寄與する施策が行われていたことを示すものとして注目せられる。また同じくカーティアーワール半島の Jūnāgaḍh 附近の古趾から發見せられた粘土製の印章に《マハーラージャ、ルドラセーナ寺の比丘僧のもの〔印章〕》[8]と記されているが、これはこの西クシャトラパのルドラセーナの建立寄進したものとみられる佛教寺院がその土地に存在したことを示すものである。たぶんそれはルドラセーナ一世のことと思われるが、ルドラダーマン一世の治世を一三〇—一五〇年とすれば、ルドラセーナ一世は二〇〇年頃に王位にあつたものと推定せられる。

① S. Lévi: Kaniṣka et Śātavâhana; deux figures symboliques de l'Inde au premier siècle, JA, 1936, p. 73. なお Nahapāna の title については A. M. Boyer: Nahapāna et l'ère Çaka, JA, 1897, p. 121 を參照

② Rapson: Catalogue of the coins of the Andhra dynasty, the western Kṣatrapas, Introd. lvi: Nasik と Nahapāna との關係については R. O. Banerji: Nahapāna and the Saka era, JRAS, 1917, p. 283 を參照

③ Lüders: List of the Brāhmī Inscriptions, nos. 1132, 1134

④ Lüders: nos. 1133; Lévi: L'Inde civilisatrice, p. 145 なおこれについては山田龍城氏の所論がある（『印度學佛教學研究』三ノ一）。

⑤ Lüders. nos. 1131; Lévi: ibid. p. 144

⑥ Rapson: ibid. p. 78

⑦ Lüders: nos 965; Lévi: ibid. p. 152

⑧ Kielhorn: Junagāḍh Rock-Inscription of Rudradāman,

Ep. Ind. Vol. 8, p. 145

五

サカ族の奉じた宗教が何であつたかという問題について、それだけを具體的に詳細に論究したものはないが、マーシャル氏の研究によると、[1] タクシラの周邊にあつては、その當時、佛教、ジャイナ教、バラモン教が行われていたのであり、イラーンのゾロアスター教も流入していたことが知られる。なかでも、かれらに對する佛教の影響は強くあらわれているのに氣がつく。タクシラに近き Chukhsa のサカの大守であつた Liaka Kusūlaka の息子 Pāṭika は、マハークシャトラパであつたが、かれは佛教の僧院を建立寄進し、釋迦牟尼の舍利を奉安供養している。マトゥラーにあつても、Rājuvula の妃 Ayasia Kamuïa によつて舍利が奉安せられ、同じくかれの息子の Śodāṣa によつて土地が僧伽に寄進せられている。しかしながら、西クシャトラパ朝の諸王にあつては、前述のクシャハラータや、今述べたマトゥラー以北のサカのごとくには明かでない。そこでいま問題とするのは、マハークシャトラパであつたルドラダーマン（一世）が佛教に歸依した人であつたかどうかということである。

羅什譯の『大莊嚴論經』卷十五に、「法師爲盧頭陀摩王說飲酒狂癡緣」という、一篇の物語が收載せられている。その物語はおよそつぎのごとき內容のものである。釋迦羅國の王盧頭陀摩はしばしば寺に詣でて法を聽いた。あるとき說法師が飲酒の過失を說いた。そのとき王は、その說法が不當である旨を述べて、高座の法師を難じた。すると法師は大衆中の外道の者を指して、諸外道は各異見を生じて顚倒の心に住するものであるから、かれらは飲酒して迷亂する者と同じく、癡狂の人というべきであると述べ、ついでバラモンの誤れる法を攻擊し、佛教の十二因緣の法以外に妙法のないことを說いたというのである。ここに登場する盧頭陀摩の原語は何であつたか、梵本に缺失があるため、明確にできないのは遺憾であるが、おそらく Rudradama であつたと思われる。dama と dāman との關係は、すでにプサン氏が Spalagadama を例として說明しているごとく、[2] スキタイもしくはパルチャのヒンドゥ化がそこに見られるのであつて、イラーン語の dama はインド語では dāman と寫される。したがつて、盧頭陀摩は Rudradāman 王を指したものとみられるのである。つぎに釋伽羅という語であるが、もしこの釋伽羅が、カシュミールの Śākala (Sāgala『西域記』、

『慈恩傳』では奢羯羅、現在の Sialkot）を指すのであれば、はたしてウジャインのルドラダーマンのことをいつたのかどうかは疑問である。[33] シャーカラにもサカがいたことは、知られているが、最近のインドの學者の説[34]によるとかのルドラダーマン一世は、Malwa, Gujarat, Kathiawar, 東部 Konkan, 西部 Rajputana および Sindh を王國の領土にくみいれることに成功したと述べていて、シャーカラとは關係がないと考えられる。むしろこの釋伽羅は Śakāra の音寫ではなかつたかと思われる。Śakāra とは、《シャカ族の後裔》を意味しているが、それが、ここでは國名として傳えられているのではなかろうか。いずれにしても、これは一種の傳説であり、そのままをただちに史實としてうけとろうとするのではないが、もしもこの盧頭陀摩王が、かの西クシャトラパ朝のルドラダーマン一世にあたるとすれば、かれが佛教の寺院にたびたび參詣して法を聽いた人として傳説せられているのであるから、かれの佛教徒としての姿が人々のあいだには描かれていたのではなかろうか。しかしながら、かのギルナールのゆたかな碑文の中には、そのことを裏付けるような文章は何も見いだすことができない。——かれは（アショーカ王のように）慈悲の精神に富んでおり、人々の安寧と幸福のために努力を捧げた偉大なサトラープであつた。しかもその風貌起居動作すべての點において魅力的であり、幾人もの王女がかれに婚約の花束（dāman）を捧げた。文典學・音樂・哲學および諸科學がかれのときにひじように普及した、ということは述べていても——。なおこの Śakāra なる語については、すでにレヴィ氏が詳細な檢討を行つているが、[35] インドの古典劇の作家が、ある王族の一人物に Śakāra なる名をあたえて、これに道化者の性格を付與して、作品の中に登場せしめているのは、一體何を意味するのであろうか。そこには、インド人側から見て、異民族に對する一種の特別な感情が潜在していたということの一つの反映がみうけられるのではなかろうか。われわれは、ここにヒンドゥの偏見にゆきあたるのである。佛教の教團は、そのような人種的偏見に對しては、きわめて明瞭な態度をとつていたのであり、たとい異民族であろうと旃陀羅（Caṇḍāla）であろうと、そこにはなんらの差別觀の介在する餘地はなかつたものと思われる。したがつてサカ族の大半は、ヒンドゥ化してしまつたものは別として、そうでないものは佛教に對して、より親密的な感情を抱いていたとみられるのである。

① Marshall : Taxila, Vol. 1, p. 58
② Vallée-Poussin : L'Inde aux temps des Mauryas, p. 295
③ 大莊嚴論經卷第二〔八〕に賒伽羅國の語がでているが、そこの梵本は Śakara となつている。賒伽羅と釋伽羅が同一のものを指すかどうかは明かでない。
④ R. C. Mazumdar—A. S. Altekar : The Vākāṭaka-Gupta age, p. 44
⑤ S. Lévi : Sur quelques terms employés dans les inscriptions des Kṣtrapas, JA, 1902, p. 123 ; Théatre indien, p. 361 ここにいうインド古典劇とは Śūdraka の Mṛcchakaṭikâ を指す。

六

さて、西暦一世紀から二世紀頃にかけての時期における西インドの佛教弘通情況はいかなるものであつたかというに、學者の研究[1]によると、北の方では當時大衆部、有部、迦葉部、法藏部、化地部の五部が、有力な部派としてマトゥラーからガンダーラにわたつて並び存し、その中、有部が最も榮えていたといわれる。また南の方では、主としてナーシク、カンヘーリ、ジュンナルなどの窟院地帶に、上座部系の部派である雪山部、賢冑部、法上部などが存在していたことが知られる。カールリーには明かに大衆部の僧伽の存在していた證據がある。とくに法上部が Sopāraka (Suppāraka) に據點をもつていたらしく、その教線はジュンナル附近まで延びていたと考えられる。[2] まさしく西クシャトラパ朝の領土については、その點について明かにする材料は見當らぬが、過去におけるマハーカッチャーナの活動ならびにその後この地方を旅行した玄奘の記述などから勘案すれば、バリュガザやスラート附近一帶は上座部の地盤であり、とくにウッジャイニーには正量部、グジャラート附近には有部が根を下していたと考えられる。しかしながら、そのことを證明する銘文のごとき確實な資料がないのは遺憾である。

つぎに大乘佛教の弘通情況に關しては、われわれは極めて興味のある記述をチベットの傳承の中に見いだすことができる。すなわちターラナータのインド佛教史[3]によれば、ほぼこの時期に、スラーシュトラにバラモンの Rigs-ldan (Kūlika) という人があらわれて、アンガ出身の大乘法に通ぜる大長老 Nanda を招請し、大乘法を聽いたという。そしてその當時諸國には大乘教の善知識が一齊に輩出した旨を述べている。また Lakṣāśva という王が西方にあらわれて一大佛教事業を行つたことを記してい

る。パクサム史[4]によると、この王は Rajputana の王であつたといつている。そこで、この王の行つたという佛教事業について調べてみるのに、ターラナータ史はつぎのごとく述べる。すなわち、Avitarka などの約五百人の大德の世に出たこと、および大寶積經や華嚴經等の大乘經典の出現した話を、ラクシャーシュヴァは聞いて大いに信仰心を發し、これらの五百名の說法者を招請しようと欲して、諸臣にはかり Abhu という山の上に五百の伽藍を建立した。各伽藍に說法者を迎え、一切の資具を用意した。このとき王の數多の眷屬が信仰心を發して出家し、大乘を聞くために入門した。そこでかれは大乘の經典を文字に筆寫せんとする願をおこし、しばしば勅令を出して書寫を命じ、諸比丘に贈呈した、というている。ここにいうラクシャーシュヴァなる王がいかなる人物であつたか、サカ系の王であつたか、はたまたギリシャ系の王であつたか、明かになしえないのは遺憾であるが、王とはいうものの、これはサカ系のクシャトラパではなかつたかと思われる。當時ラージュプターナの南西にサカのクシャトラパがいたことはよく知られている。[5]その當時世にあらわれていた大乘經典は大寶積經の十萬法門と、有空集と華嚴經の十萬頌一千偈と、入楞伽經二萬五千偈と、密嚴經の一萬二千偈と、眞實法集經の一萬二千偈などであり、これらの諸經典がかれの命によつて筆寫せられたとつたえることはすこぶる興味のあることである。しかしながらこれらの經典がいかなる文字で筆寫せられたかは明かでない。この問題に關しては、それぞれの經典について嚴密な考證を要するが、いま一例として大寶積經について、學者の研究せるところをみるのに、その原型は、ここのチベット傳にいうごとく Ratnakūṭa と呼ばれていたらしく（あるいは Kāśyapaparipṛcchā とも呼ばれていた）、第四十三會の普明菩薩會が原始的中核と見られ、植物地誌の面から考察すると、それは三―五世紀に西インドで行われ、總じて原型の部はプラークリットで書かれていたといわれている。[6]われわれは、目下のところ、その他の經典についていささかでも明かになしえないのは殘念であるが、前述のごとく西インドにおいて、サカ族が勢力を占めていた時期に、これらの經典が編纂せられ、そしてこの地方にも普及しつつあつたということだけはいえそうである。また、かのターラナータ史が、大乘の名聲が諸地方につたわるや、大乘非佛說論がおこつてきて、諸聲聞中に大乘を誹謗するものがあらわれたとすること、しかし大乘派のものも、大概は諸聲

聞すなわち諸部派のものの中にまじつて一處に住しつつ、しだいに力をもつにいたつた旨を述べていることは注意しておくべき事項であろう。もちろん、このことはこの場合のチベット傳承の記述が信頼できるものとしての前提に立つてである。これらの諸點に關しては、今後なお一層の究明がなさるべきであろう。

① 靜谷正雄「ギリシャ・サカ・パルティア・クシャーナ時代の印度佛敎銘文に就いて」（『佛敎學研究』第七號）

② Lüders: nos. 1151

③ Tāranātha's Geschichte des Buddhismus. XIII, p. 70

④ Dpag-bsam ljon-bzaṅ, Index p. 114

⑤ S. Lévi: ibid. p. 150

⑥ 宮本正導編『大乘佛敎の成立史的研究』附錄第一（四八九頁）

補註——五の項二六頁における Śakāra に關連して、Śakāri (Enemy of the Śakas) の語についても一考を要する R. B. Pandey: Vikramāditya of Ujjayinī p. 102